

ドローンで追肥散布

プラスチック代替の施肥技術

片倉コープアグリ



ドローン向け肥料を推進する滝田課長(右)と神田係長

国の方針の元、補助金などにも後押されて、農業用ドローンの導入が進んでいる。農薬散布が先行して導入が進んだが、機体のさらなる有効活用に向けて肥料散布への利用についても検討する自治体、経営体が増えてきているという。そこで、創業100年の歴史を持ち、国内トップクラスの肥料メーカーである片倉コープアグリ・小林武雄社長、東京都千代田区九段北の肥料本部技術普及部の滝田元康課長と神田秀美係長に肥料の空中散布の可能性について伺った。

肥料のドローン散布。被覆肥料を用いた農業が求められるよう、場合全体へ均一に肥料を散布に取り組んだ背景は、基肥一発肥料は、その省うになってきました。当布する全面全層施肥に比べて、稲の株元から数センチ離れた局所へ筋状に施用する側状施肥を行うことで減肥が期待でき、面積は約6割を占めてい

肥料においては、そのプラスチックを使用した被覆段施肥技術、省力追肥技術では流し込み施肥、空

環境問題 — 基肥一発肥料とは。効果も期待され、国としても積極的に勧めてきた「その多くは被覆肥料でも積極的に勧めてきた技術です」

「数年前からプラスチックの被膜がマイクログラスチックの要因として環境問題

肥料に頼らることができません。ほく資源アクション宣言」

を出し、農地からのプラスチックの流出抑制へ農業者に注意喚起することや被膜殻の分解性向上の技術開発、他の機能性肥料の活用拡大等に取り組み

そして今年1月には、JA全農、全国複合肥料工業会、日本肥料アンモニア協会の3団体が、2030年にプラスチック被

膜を使った肥料をゼロにする方針を掲げました。追肥が必要なのは真夏

社が提案する一つが基肥行うのは非常に重労働で、この作業を地上から

ドローン活用の可能性は？

「産業用無人ヘリによる散布は、作業時間や労働負荷が少ない一方、必

「水稲向けの粒状肥料の『空散追肥306』と、麦・大豆向けの高濃度散

「空散追肥306」は、大豆の一般的な栽培体系では、窒素施肥は1回だけですが、開花期追肥は

【空散追肥306】▽保証成分Ⅱ窒素30.0%、リン酸0.0%、カリ6

【窒素液肥「コロン」】▽保証成分Ⅱ窒素27%、リン酸0.0%、カリ0.0%、

性状ⅡpH10.0程度、比重1.28。

また、窒素液肥「コロン」は、希釈倍率2〜5倍の高濃度散布でも葉やけしにくく、液状のため粒剤散布装置も不要となります。